

新購入主要文献解題

1. 『草木染 型染の色』
山崎青樹
美術出版社
昭和 52 年
2. 『草木染 きもの色』
荻野彰久
染織と生活社
昭和 54 年
3. 『草木染 木綿・麻の色〈百色〉』
荻野彰久
染織と生活社
昭和 63 年

これら 3 冊はいずれも草木染に関する手引書である。草木染は、「植物の根、樹皮、茎、幹、葉、花、実などを染料とし、またある種の虫などの分泌液を染料とする動物性の染料も草木染の染料に含める。各種の植物から植物色素を多く含んでいる部分を採取し、陰干しにした後、煮出して色素を抽出し、その液を漉し分けて染液として浸染や引き染で染色した後、さらに明礬、鉄、銅、錫などの媒染剤を溶解した液に布を浸すか、刷毛で引いて、発色と色素の固着を行うのが一般的な方法である」（第 3 書の解説から）。型染は「今日では紙型を用いた染色、すなわち小紋や中形または型友禅や紅型などをさす……（中略）。渋紙に模様を切り、その型紙を用いて糊を置いて染色する。」（第 1 書「序」から）。出版年が多少古いが、古書店にはその分割り引いていただいた。しかし当然ながら内容はまったく問題がなく、貼付されている完成品の見本（サンプル）もほとんど褪色していない。

第 1 書には型染の色として 50 色、第 2、第 3 書にはそれぞれ 100 色の結構大ぶりの（12cm × 10cm または 7cm × 7cm）見本が添えられている。それらを眺めるだけでも大変楽しいし、その色の持つ深みや柔らかさが十分伝わってくる。し

かも手で触れることができるので、その感触も楽しむことができる。

しかしいったん手引きの中に入り込むと、色を楽しむどころではなくなってしまう。何から何まで、あらゆることが計算の世界なのである。解題者を含めて、将来は草木染のようなことをやってみたいとほんやり考えたことのある読者は少ないと思うが、その夢は断念したほうがよさそうである。計算法は自己の経験からしか得られないので、それを確立するには途方もない時間を要する。「型付け（型紙を作る）3 年、糊（防染用の糊を作る）8 年」（第 1 書）とされる。白生地に防染のための糊をつけることを、糊付け、または糊置というが、昔から糊置する職人は糊置だけで、他の仕事は一切しなかったという（同書）。大変な世界なのである。紙幅の関係で、そのち密な計算法を紹介できないのが残念である。興味ある読者はぜひ実際に本を手にとって納得していただきたい。

最後に作者の言葉を記しておきたい。「ある日、グレーの小さな布切れを見つけました。素朴で、温かみの伝わってくるような深い色をたたえた布でした。じっと見ていると、何か語りかけてくるような気がして、そっと手にとってみました。それはざっくりとした木綿の布でした」（第 3 書）。このぐらい感性が研ぎ澄まされないとダメなのかも知れない。あらためてアーティストのすごさを思う。

（人間科学部 三星宗雄）